



学校給食プログラム

—学ぶ、そして生活を変える—



長年にわたる実績と効果

学校給食プログラムには、子どもたちを学校に通わせ、学習する際の集中力を高める役割があります。また、これは教育の機会を増やし子どもたちの栄養状態を改善するための、最も効果的な方法の一つでもあります。わずかな投資で子どもたちの生活を抜本的に変えることができます。日本、アメリカ、イギリス、イタリア、フランスなど多くの先進国では、長年にわたり国が学校給食を支援し、その実績は学校給食プログラムの有効性を証明しています。

WFPの学校給食プログラムの概要

WFPは約2,000万人の子どもたちに学校給食を提供しており、その約半数は女の子です。学校給食プログラムが実施されている70ヶ国のうち半数以上はアフリカの国で、約1,100万人の子どもたちが支援を受けています。学校給食プログラムは女の子の就学率や出席率を高める効果があることが証明されています。また、過去40年間に28カ国がWFPからの支援を卒業し、そのほとんどが自分たちの力で学校給食を実施しています。

学校給食プログラムの効果

- 教育の促進
- 就学率・出席率の向上
- 健康・栄養状態の改善
- 女子教育の支援
- 経済成長の促進
- ミレニアム開発目標(MDGs)達成へ寄与
- 地元農民の支援
- 児童労働の撤廃
- 平和構築支援
- 地球規模課題への取り組みの場

必要とされる国際社会からの支援

開発途上国では約5,900万人の小学生が、空腹の状態ですべての学校へ通っています。このうち、2,300万人は45のアフリカ諸国に暮らす子どもたちです。十分な食事をしていない多くの子どもたちは空腹のあまり、学習することができません。これは、子どもたちが能力を伸ばす機会を損ない、家族、地域社会、ひいては一国の経済に損失を与えることを意味します。食糧によるわずかな投資が、やがて大きな違いを生むのです。

およそ 5000 円で

1人の子供に学校給食を1年間提供できます。

※最近の穀物や原油価格の高騰のため、コストは地域・国によって差があります。

アフリカの45カ国で2,300万人の子どもが
未だに空腹の状態ですべての学校に通っています。

ミレニアム開発目標(MDGs)達成に向けて

学校給食プログラムへの投資を増やすことは、以下3つのMDGsを達成することにつながります。

- MDG1：飢餓に苦しむ人口の割合を半減させる。
- MDG2：全ての子どもが初等教育の全課程を修了できるようにする。
- MDG3：初等教育レベルにおける男女格差を解消する。

学校給食プログラムへの投資の効果

教育の促進—子どもたちにとって、空腹の状態授業に集中することは困難です。学校に到着した直後に出される軽食や昼食によって、子どもたちは力が湧き、授業に集中することができます。

就学率・出席率の向上—学校給食があることにより、子どもたちは学校に通いやすくなります。WFPの支援を受けている学校では、最初の1年間で、就学率が女子で28%、男子では22%上昇しました。

健康・栄養状態の改善—学校給食プログラムにはビタミンやミネラルといった微量栄養素が含まれています。これは子どもたちが学び、自らの能力を発揮し、さらには伸ばしていくために必要です。

女子教育の支援—学校給食プログラムは、女子の就学率・出席率の向上に寄与します。特に、女子の場合は、生徒本人やその家族が家で食べるための食糧を学校で配給し持ち帰らせることもあり、女子教育の促進につながっています。

経済成長の促進—教育を受けた人はより高い賃金を得ることができ、自営業の場合もより高い収入を得ることができます。教育への投資は個人と社会の両方に高い効果をもたらします。教育の効果は低所得国でより顕著で、特に初等教育や女子教育に投資すると大きな効果があらわれます。

児童労働の撤廃—学校で給食を提供することにより、家族は子どもを家で働かせる代わりに学校へ行かせるようになります。

地元農民の支援—WFPは学校給食で用いる食糧を、可能な限り地元の小規模農家から購入します。これは、地元農民や地域経済に対する支援にもなります。

平和構築支援—戦争や紛争を経験した子どもたちは、学校に通い、給食を食べることで安心感を得て、平和な日常に戻っていくことができます。一般的に学校教育は、争いの要因となる差別、貧困、飢餓、資源をめぐる衝突などを緩和するという重要な役割を担っています。

地球規模課題への取り組みの場—学校給食と連動して、寄生虫駆除、微量栄養素の補給、熱効率の良いかまどの導入、飲用水の供給や衛生設備の設置、保健・HIV/エイズ教育、心理・社会的支援、マラリア予防、学校菜園などの活動が行われることもあります。学校給食プログラムを実施することによって、学校は子どもたちが抱える様々なニーズに対応するための場ともなるのです。